

虫も 殺さぬ



警視庁北多摩署特捜本部
むしどころさぬ

太田蘭三





講談社文庫

虫も殺さぬ

警視庁北多摩署特捜本部

太田蘭三

講談社

【著者】太田蘭三 1929年、三重県生まれ。中央大学法学部卒業後、同人誌「新表現」を経て、1956年、時代小説でデビュー。長年続けてきた登山と釣りの経験を生かして、山岳推理の第一人者となる。アウトドア作家で名探偵の“釣部溪三郎”シリーズは圧倒的人気を誇っている。“顔のない刑事”“北多摩署”シリーズをはじめ、『破牢の人』『白の処刑』『闇の検事』など冤罪ミステリーにも話題作が多い。2012年10月逝去。享年83。

むし ころ 虫も殺さぬ 警視庁北多摩署特捜本部

おお た らんぞう
太田蘭三

© Fumihito Ohta, Yasuyuki Ohta, Yuya Ohta 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年2月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277770-4

目次

自他殺

7

情事の毛髪

45

A型の女

58

山仲間

96

捜査の壁

145

誘拐と殺人

166

犯人追跡

235

容疑事実

304

真相

340



講談社文庫

虫も殺さぬ

警視庁北多摩署特捜本部

太田蘭三

講談社

目次

自他殺

7

情事の毛髪

45

A型の女

58

山仲間

96

捜査の壁

145

誘拐と殺人

166

犯人追跡

235

容疑事実

304

真相

340

虫も殺さぬ

警視庁北多摩署特捜本部

（自他殺）

「虫も殺さぬ」の題名は、この事件の真相を暗示している。事件は、昭和二十一年四月、警視庁北多摩署管内の某町で発生した。被害者は、同町に在住の某氏（以下、被害者）である。被害者は、事件発生当日、自宅に居たところ、突然、背後から襲撃を受け、致命傷を負った。発見されたのは、被害者の隣人に、被害者が倒れているのを発見したところからである。被害者は、事件発生後、数日間、病院で療養したが、結局、死亡した。事件発生後、警視庁北多摩署は、被害者の自宅を捜索し、事件発生現場付近に、被害者の血痕や、被害者の所持品などを発見した。また、被害者の自宅の近所には、被害者の友人や、被害者の家族などが住んでいることがわかった。事件発生後、警視庁北多摩署は、被害者の友人や、被害者の家族などを捜査したが、事件の真相は、いまだに不明である。この事件は、警視庁北多摩署管内で発生した数少ない事件の一つである。この事件は、警視庁北多摩署管内で発生した数少ない事件の一つである。この事件は、警視庁北多摩署管内で発生した数少ない事件の一つである。

図1-1 研究の目的

図1-2 研究の意義

本文地図 ジェイ・マップ

自他殺

1

電話が鳴った。

佐藤課長が、受話器を取る。

七月二日の午前十時二十分だった。

隣の席の久我課長代理が首をまわして、佐藤を見る。

警視庁北多摩警察署、刑事課の係官室である。

このとき、強行犯係（殺人、強盗、強姦、放火、誘拐担当）の席にいたのは、蟹沢

係長と小松部長刑事、相馬、鴨田、森刑事らであった。

「えっ、なにっ、死んでる？」

佐藤の表情が締まって、声が大きくなる。

みんなの視線が、佐藤にあつまる。

「ああ、……うん、……うん、……なにっ、沈んでいる？ ……ホテルは？ ……ああ、……うん、……うん、……わかった。……十一階だな、……ああ、出かける、よし、了解」

佐藤は、受話器を置くと、強行犯係の席に目を向けて、

「一一〇番通報だ。〈立川タワーホテル〉の一一〇七号室の風呂場で客が死んでいる

そうだ。湯船に沈んでいるとのことだ。宿泊者名簿によると、高淵貞男、四十八歳。

客商売だから、裏口から入ってくれ、と言っている」

そう、てきばきと告げる。

「溺死じゃないかな」

と、久我が言った。

「ええっ、風呂で？」

鴨田が、合点のいかなない顔を久我に向ける。

「入浴中の溺死は意外に多いんだ。新聞によるとだね、去年は、二千六百件もあったそう。八割は六十五歳以上の高齢者でね。アメリカの二十倍、イギリスの四十倍に

もなる。これほど多いのは、日本人が熱い風呂が好きだからだ。血圧が上昇すると、脳出血を起こすし、下がると、のうこうそく脳梗塞や心筋梗塞になったりして、意識を失って、おぼれるんだね」

「へーえ。くわしいですね」

相馬は、感じ入った声を出した。

久我が、得意げな顔を見せる。

「だけど、四十八歳ですよ」

また、鴨田が言った。

「四十八でも、高血圧や低血圧の男はいる」

久我が、むきになる。

「さあ、出かけよう」

蟹沢が、白い手袋を手にして腰をあげる。

相馬も、のっそりと立つ。

森が、調べ室のわきのドアを開けて、鑑識係の小部屋に入っていく。

佐藤や久我、蟹沢や相馬ら強行犯係の刑事は、この刑事部屋を出た。

捜査専用車を連ねて現場へ走る。鑑識車が、つづいた。

JR中央線のガードをくぐった。左折して、立川駅北口の大通りを渡る。新しいビルのあいだを通り抜けて、〈立川タワーホテル〉の裏へ出た。

パトカーが一台停とまっている。

刑事や鑑識係員らも、車を出た。

「こちらへ、どうぞ」

ホテルマンが、先に立つ。

従業員の通用口から入って、業務用のエレベーターで十一階に上がった。廊下へ出る。

一一〇七号室の前には、パトカーの巡査二人と、中年の紺のスーツの男が立っていた。

ドアが開いている。

蟹沢が先頭で、短い足でセカセカと歩み寄る。巡査の拳手を受けてから、

「失礼ですが、あなたは？」

と、中年の男に問いかけた。

「サブマネージャーの平田ひらたと申します」

「あとで、お訊ききしますので、ここにいてください」

「はい、承知しました」

平田が、丁寧^{ていねい}に言葉を返す。

蟹沢が入った。佐藤や久我、相馬らが、つづく。鑑識係員らも入る。明かりが点^ついていた。

右側にクローゼットがあつた。その奥が、バスとトイレになつていて、ドアが開いている。

左手が洋式の便座で、中ほどに洗面台、右手に湯船があつた。水位は縁^{ふち}から二〇センチほど下がつたところにあつて、水は赤く染まつていた。蛇口の反対側の水面に頭髮^{のそ}が覗^{のぞ}いている。湯船の近くの床に、カッターナイフが落ちていた。刃に乾いた血が付着している。

「手首でも切つて自殺したんじゃないのかね。湯の中だと、なかなか血が止まらないからね」

覗きこんで、久我が口を出す。

「まず、現場鑑識だ。写真撮影とカッターナイフの収納。指紋採取に注意するよう^{けんぶん}に。湯船の水も採取してから落としてくれ。室内の見分^{けんぶん}もたのむ」
と、蟹沢が指示をする。

それぞれに手袋をはめて、靴カバーを履く。

ダブル・ルームであつた。ベッドは乱れていた。ベッドの裾には、ドレッサーデスクがあつて、壁にミラーが嵌めこまれている。窓辺には、テーブルセットがあつて、窓のカーテンは下りていた。テーブルには、ウイスキーのボトルやミネラルウォーターのビン、グラスなどが載っている。

カメラのフラッシュが、はしる。指紋の採取も、はじまつた。

そして、湯船の水が落とされた。

男の死体が、あらわになる。

体つきは、中肉中背といったところか。着衣は、白いパンツとホテルの浴衣ゆかただけであつた。帯を締めているが、前がはだけて、胸や腹、下肢を露出させている。浴衣もパンツも、血を含み、蒼白そうはくな肌に張りついていた。うなだれるように顔をふせ、湯船の形に沿って背中を丸め、下肢を突っぱるようにして膝ひざを立てていた。両手を左右に垂らしている。

蟹沢が、左手を取った。関節が硬直している。手首をつかんで持ちあげた。手の平が白い。手首に切り傷があつた。一すじ横にはしって、柳葉状の創口そうこうを見せている。

「手首を切っている。やつぱり自殺だな」

久我が、断定的な言葉を吐く。

「切り傷が、一本というのが引っかかりますね」

そつと左手を離して、蟹沢が言った。

「どうしてだね？」

久我が、蟹沢に首をまわす。

「たいがい、ためらい傷があるものです。覚悟の自殺でも、こう一氣にスパツといくのは、めずらしい」

「痛いかな、どうか、ためしに、ちよつと切つてみるということですね」

と、鴨田が口を入れる。

「死のうとしてるんだ。痛いなんて言つてる場合じゃないよ」

久我が、鴨田を睨^{にら}んだ。

「しかし、普通は、二本か三本ためらい傷があるものです」

蟹沢は、語気を強めた。

相馬は、だまつて死体を見つめている。

「状況から見て、やはり自殺じゃないかね」

と、佐藤も口を出す。